ジョシュア・ボールドウィン

小さな闇

 この物語には主人公の「私」がお父さんと一緒にブエノスアイレスにいきます。お父さんがギターを買いに言っている間、私はエビターの墓を見に行って墓地の広さに驚く。そしてそれが三年前死んだお母さんは小さい家に入るのがいやだったことを思い出しました。お父さんとお母さんはお互いを愛していたが奇妙なところがありました。お父さんが自分の誕生会とかで中心になると逃げ出してしまいます。そして、お母さんはそれが分かっても箱に入られた感じで待ちました。お祖母さんはフランスの画家の愛人で、彼に捨てられたから精神的な病を抱えました。一人ぼっちになるのが怖いから自分の家の中に小さな段ボール家を作ってお母さんがそこに二週間一歩も出ずに暮らしました。それが小さな家に入るのが嫌いになった理由でした。私は外から見て平和だった家族の中に小さな深い闇があったことに気づき、もしかすると自分の中にも闇があります。でも、それは恥じるべきことではないです。

 それが「小さな闇」の大体のあらすじですが、特に面白い打と思ったところは自分のお父さんがギターを買いに言っている間、主人公が墓地で時間をつぶす事です。自分のことなんですけど、墓地はそんなに面白いところではないと思いますが…それと、お母さんとお祖母さんはすごい過去がありました。それから「闇」が出来ておかしくないと思います。

 この小説は割と面白かっただと思います。あまり深い意味いみはないのですが、自分の中に闇があることを認めて受け入れるのがいいと思うんです。それは簡単に出来ることじゃないです。自分の中にある闇を改めて気づかせました。私の両親はこの物語の中にお父さんとお母さんの過去はそんな残酷なものじゃないんですが、私の両親の中にも引かれ合っていると思います。

 主人公のお母さんの小さな闇は自分の段ボールに暮らさせた過去で自分の夫を待っていると過去の小さな家に入れられている感じがすることだと思います。それと自分の過去を夫に画していることもあるんだと思います。で、私自身は箱に入っている感じを経験したことがあるかどうかは分からないんですが、私は少しでもストレスに耐えられない。少しでも感じたら前へ進まないって感じがしてすごく嫌なんです。それは同じかどうかは分からないんですけど、多分近いだと思います。

 自分の中にある小さな闇に関して、みんなの中にその闇があるんだと思います。小さいかどうかは人それぞれだと思うんですけど、皆は闇を抱え込んでいるのは確かだと思います。人間は完璧じゃないし、過去に嫌なことがあって自分の生き方に影響を与えてしまうですから。私としては、この物語と同様、その闇は恥じるべきことじゃないと思います。それをどう対処するかが問題です。それで自分の中に闇があるかどうか、それはもちろんありますが、私は多分今までそれから目を逸らしていたので具体的には何の闇のかは知らないんです。正直、具体的に分かっても書かないと思うんですが、恥ずかしいことではないかもしれないんですが、それを他の人に見せるか話せることがまだ出来ません。